

火山噴火予知連絡会第1回活火山ワーキンググループ 議事録

日時：平成11年10月18日（月）10時30分～12時

場所：気象庁第1会議室

出席者：委員：井田、宇井、岡田（弘）、浜口、藤井（敏）、藤井（直）、岡山、須藤（靖）、石原、須藤（茂）、土出、小宮

オブザーバー：中辻（国土庁）

事務局：三上、佐久間、佐藤

1. 検討方針とスケジュール

- 事務局作成の検討方針とスケジュールを説明。第1回は候補火山の概観、第2回からは候補火山の個別議論、第3回からは長期的な活動特性の評価の課題を行う。第5回でまとめて公表を予定。目標は二年間。

2. 検討資料の説明と議論

- 資料説明：第四紀火山カタログ作成委員会が作成したカタログから抽出した最終活動期が最近1万年以内の火山と活火山の比較の一覧表を提示。それぞれの火山についての火山カタログと個別の火山体ごとのバックデータを整理。今後この資料をもとに検討を進める。
- 問題点として、一点はひとつひとつの火山をどのように分けるかということがある。従来出版された資料では、結構統一がとれていない。また年代情報そのものにまだまだ随分足りない点がある。
- もう一点は、活発な噴気活動をしているものも活火山の定義に入るが、このカタログの年代整理では噴気活動は入れてないので、活発な噴気活動を現にしているはずなのにリストから漏れている、というものがある。そのことは少し補足して検討しなければならない。
- 2000年の基準で新たに活火山入れるべきものは、前のサブグループで3つ追加したばかりなので、ここには挙がっていない。
- 現在活火山と認定されているものの新しく作ったカタログでは外すことになるような活火山として、まず恐山と八幡平がある。噴気活動が活発といわれているが、恐山は確かに活発だが、八幡平・茶臼は要検討。
- 赤城山は前のサブグループでも話題になった。火山カタログでは最新の活動年代データが2万7000年になる。それにもかかわらず活火山と従来から認定されているのは、古文書に12世紀位に「山に煙り有り」という記載があるため。要検討。
- このカタログでは、マグマ活動を採っているため水蒸気爆発は全く年代に入っていない。
- 水蒸気爆発は活動が非常に小規模で、証拠を残さないというのは多くある。いくらがんばっても相変わらず小さい水蒸気爆発は漏らす可能性がある。それは基本的な精神としてわかり次第活火山として追加するという、そういう精神でいけば良い。
- たとえば、屈斜路湖は、屈斜路カルデラの中にある溶岩ドーム群のアトサヌプリともう一つの溶岩ドーム群が少し離れて中島というのが屈斜路湖の中程にある。カルデラ内で数km、5～6km以上位離れており、全然位置が違うものを屈斜路という名前で統一してよいか問題がある。
- また支笏も第四紀カタログではまとめると支笏になるが、具体的に樽前とか恵庭岳が支笏カルデラ内にあるものを、別々な活火山として既に活火山総覧では掲載している。
- もうひとつ別な事例として、八丈島は西山に加えて東山も年代値が出てきて、1万年とすると活火山に入る。これを一括して良いかどうか。
- 指宿火山群・池田カルデラ・開聞岳についても、活火山総覧では開聞岳だけが活火山に認定されているが、数km離れた池田カルデラの年代値が5千何年というオーダーでわかっている。これらを一括するのどうか。
- 焼岳の少し南に離れたところにアカンダラというのがあり、これも年代測定すると6460年なので1万年の枠に入る。
- 83火山から86火山に追加したときに羅臼を入れたが、ある程度議論があった。地元で山を見たときに別々な山としているので、防災上の視点からも別々な方が良いであろう、とした。学術上の見地でこだわっても、地元がそういう視点で見えていない。そうすると一つの山の範囲をどうとるかに係わってくるが、火口が何km離れたら別にするとか数値では一義的に決められない。山の大きさは個々に随分ちがう。
- 基本的には活火山の数をあまり増やさない方がよく、活火山としては一般的な名前を使った方がよい。細かいことについては、活火山総覧中でどう記述するかということ。
- 分け方の問題の方向としては、明らかに防災上或いは火山学上、分けた方がわかりやすい事に関しては現在の活火山についても考え直して分ける。明確に理由があるものは名前を変える検討をするということではいかか。
- ここでは1万年と区切ってリストを作成したが、例えば1万年の枠を外すとどうなるのか、1万年にそれほど拘らず、むしろ我々の立場から活火山はどうあるべきかということを考えてそういうことを出せたらよい、と思う。例えばこのリストを2万年、3万年、5万年としたらどうなるか。
- 北海道の濁川が年代測定から1万2千幾らで1万年枠から外れるが、そういう山をどう扱うかという問題もある。1万年と1万何千年の間にそれほどの区別があるとは思えない、という問題が出てくる。
- もう一つの問題は、いわゆる大規模火砕流を出してカルデラを成すような活動について。1万年スケールで機械的に拾うと、北海道の摩周、九州沖の喜界カルデラはそれぞれ7000年前に活動がある。これらは今活火山に入っているが、大規模火砕流のせいで入っているのではなくて、別の後の活動のせいでたまたま入っている。ところが、例えば九州の阿蘇カルデラでわかるように、そういう活動のインターバルは数万年に1回位。他の大部分のカルデラは1万年に入っていないので今取り上げられていない。例えば支笏は4万年前に活動している。そういうのはどうするかというのが前のWG「火山噴火の長期的予測に関するワーキンググループ」で問題になっていた。
- ひとつの手法として、活火山総覧で山のリストの後ろに補足説明とかのタイトルで、カルデラのケースとか、大規模火砕流のケースとか3万年でも5万年でもリストの補足説明を付けるか。